図工・美術部会

一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか

Ⅰ　研究の内容

・子どもの課題や実態にあった題材と授業づくり
　一人ひとりの力を引き出すための授業の組み立て方の工夫。子どもの課題や実態をとらえ，どのような力をつけたせたいかを考えた題材設定の研究を深める。
・子どもの表現活動によりそう支援のあり方
　子どもか「みて，きいて，かんじて」鑑賞や造形活動に向かうとき，どこで悩み，どのような工夫が生まれたのかを読み取る工夫を模索していく。
子どもの表現活動によりそって，おもいが出る，おもいが出せる支援を考えていく。
・つながりと広がり，先を見通した実践の積み重ね
　教職員と子ども，子どもと子ども，小学校・中学校のつながり，保護者とのつながり，教科と教科，題材と題材等の関連・連携を図って美術教育を進め，広げていく工夫を考えていく。

1　研究の具体的内容

（1）　小学校の実践から（２月統一授業研）

『どんどん　どんどん　つないで　つないで』(小学校２年)　　廣瀬　きよ美（神金小）

新聞紙を手で裂いてテープ状にし，教室の中いっぱいに新聞紙をつなでいく活動に身体全体を使って関わり，活動していく授業であった。導入段階で新聞紙を「手で裂く」心地よさを味合わせる時間を十分にとり，期待感を高めてから活動に入った。活動に入ると，題材名通り，どんどんつないでいく様子が見られた。思いついた形をもとに活動を進めながらも，授業者の声かけによって自分や友達のつないだかたちに関心を持ち工夫する様子が多く見られた。事前の授業案検討の内容が授業に生かされ，部会研究の深まりが感じられた授業であった。

（2）　中学校の実践から（８月統一授業研）

『心　和む　時間』(中学校２年)　　雨宮　智美（山梨北中）

生徒が生活のいろいろな場面から見つけたものやことをもとに構想し，立体に表現する題材を設定した。材料や道具の特性を生かして新たな表現方法を工夫し，造形活動を楽しんで進めていく力を育むことができる題材であった。「計画・自己評価カード」に振り返りや見通をもたせる工夫をしたことで，一時間一時間の目標をはっきりさせることができていた。長時間の題材において制作意欲を持続させるためにも役立つものとなっていた。また，「デザインプラン報告書」をとりいれたことで，新しい思いつきを引き出したり，形について意識したりするきっかけになっていた。さらに，美術室内に「作品のパーツ展示コーナー」で，先輩の作品や制作過程でできた様々な形をさりげなく展示し，普段から目にする機会をつくっておいたことは，互いの表現を認め合ったりアドバイスをしあったりする活動を引き出すための環境作りとして参考になるとりくみであった。

（３）県教研レポートから

『墨のよさや面白さを発見しよう』（小学校６年）　　安富　智恵美（山梨小）

筆だけではなく，ブラシや小さいほうき，スポンジなど様々な描画道具を使用し，墨独特のにじみやかすれ，濃淡を楽しみながら表現する題材であった。子どもたちはそれぞれ，全紙大の紙や，中には梱包財として使われていた何メートルもある長い紙に，思い思いの表現をし，生き生きと活動していた。体育館でのグループごとの発表会では，それぞれの表現意図を堂々と発表しあい，友達の作品を興味深く鑑賞しあう姿が印象的な実践であった。主に使われていた紙が洋紙だったため，墨独特のにじみやかすれが生かしきれていない面もあったが，子どもたちの表現の幅をひろげるきっかけとなる授業であった。のびのびと活動する環境を設定した実践は，高い評価を得ることができた。

Ⅱ　成果と課題

１　成果として

研究テーマに沿って，一人ひとりが実践的にとりくむことができた。子どもたちの発達の段階を考えながら図工・美術でどんな力をつけさせたらよいのか，そのためにはどんな題材や授業を仕組めばよいのか，子どもの思いを引き出す支援はどのようなものか全員で研究を深めることができた。

一人一実践による実践報告では，実践経過その作品をもとに提案がされ，研究討議が行われた。実践も児童生徒の発達段階や実態をふまえ，生活に即した活動が展開されていた。実際に作品を見ながら題材材料支援方法など様々な工夫を学び合うことができた。

また，毎回，研究会場を持ち回って研究会を行うことで各校での作品展示や学習環境を見合うことができた。各校での普段からの学習環境作りを学び合うことができたことは，授業作りに対する幅を広げることにつながった。

さらに，小中一緒に研究を続けてきていることで，小学校から中学校へのつながり，小学校・中学校それぞれでの指導などを学べる場になっている。

２　課題として

部会員の減少により，部会員のいる学校が減っている。そのため研究したことが，部会員がいない学校には広がっていきにくい。部会での成果を広げていくには，機会を捉えて児童生徒作品についてギャラリートークなどをしたり，アートカードを使った実践を紹介したり，図工・美術の授業づくりに役立つ取り組みを伝えていったり等が考えられる。

授業研究は，小中９年間を見通した授業について考えたり，互いの子どもの様子を見られたりするよい機会であるが，少ない部員では年２回の授業研究は負担に感じる部分もある。授業研究にこだわらず，実技研修を行って新しい題材や材料を体験したり，講師を招いての講義で学習を深めたりして，授業に生かしていく等の研究方法を取り入れていきたい。

（部長　谷澤　糧子）